

消しゴムについての文体論的ノート

内山和也

A Stylistic Account on “eraser”

UCHIYAMA, Kazuya

キーワード：テキストの修正装置，消しゴム，ブラウズ，文体の引用

0. はじめに

テッド・ネルソンによる60年代の造語〈ハイパーテキスト〉は、「順序通りに書かなくても良い文章，つまりひとつの文章がいくつかに分かれていて，対話的な画面上で読者が読みたいところを自由に選択できるようなもの（ネルソン 1994：42）」であるとされる。ハイパーテキスト環境の特徴のひとつを端的に言い表わせば〈情報が増大するほど一貫性が失われてゆく〉といえる。これは，今日，ICT（情報通信技術）の発達によって印刷テキストでも一般的な文章作法となっている。テキストの量的・質的な増大が，読み手の能力をはるかに凌駕しているとき，読み手は自らの手に負えるテキストを作り出さなければならないし，テキストはそのことを許さなければならない。そうしなければテキストは〈記憶〉という存在基盤を失うだろう¹⁾。

また，テキストは，物理的支えなしにも存在しない。我々の身体が，それを知覚しなければならないからである。そして，その支えには，書き手の用いるものと読み手の用いるものがある。書き手の用いるものは，大抵，読み手も用いる。道具立てにおいて非対称性が成り立つものとして，書見台と消しゴムとが思い浮ぶ。古く，写本や印刷本は，貴重であったり巨大であったりすることを理由に，書見台に括りつけられることになった。同じく，現在，電子書籍は専ら技術的な理由からハードウェアに括りつけられている。書籍と直接比較できるのは閲覧ソフトのインタフェイスである。デスクトップ機での読書は，書見台での読書に似ている。また，「作者」の存在するテキストは，その外形に書物（紙に印刷され製本されたテキストの配付形態）を指定するため，消しゴムは読み手には使えない。紙の上の書き手の特権は消しゴムに象徴される²⁾。

本稿では，消しゴムに代表されるテキストの修正装置に焦点を当て，それらの道具立ての間の関係を，文体論的視点で整理することを通じて，従来周知的

と見做されてきた表記上の要素と，他の表現的現象との間を関係づけて論じる方向を考えたい。

1. テキストの修正における追加と削除

バルト（1987：76）は，話しことばでの修正・訂正は，削除でも抹消でもなく，訂正を付け加えることであるという。書きことばでの修正は鉛筆によっても消しゴムによっても可能だが，話しことばはそうでない。初期の印刷文化内では，書物が「短期間に利益を得ようとやっきの無知な印刷業者の手に渡ると…異本が急増し，正誤表をきりなしに出さなければならなかった（アイゼンステイン 1987：56-80）」し，電子掲示板などの電子コミュニケーションでは，訂正を付け加えることがしばしば見られる。テキストの修正法には追加と削除とがあるが，消しゴムは，時間軸を逆行し，ことばを〈削除〉し〈修正〉する点で，コミュニケーションの速度に関わっているように思える。

1.1. コミュニケーションの速度

伝達の速度は，技術とメタファーとの両面から，コミュニケーションの様式を変え，同時に表現を含む情報伝達を速度という観点から捉えるよう要請する（拙論 2002b 参照）。人間のコミュニケーション行動において「言語」を際立たせているのは，その速度である。言語ほどトータルに人間に対して素早くはたらきかけ，それを動かすものはない。言語コミュニケーションの速度を問題にすべきことの源がそこにある。杉本（2001）は，三島由紀夫の『新聞紙』を対象に，移動する行為者に体感された速度が，実在する物理的時間³⁾を空間の実在から引き剥がして〈純粹に意識的な時間〉をうみだす表現上の効果（『新聞紙』では現象の表層における因果的直結性の設定）について述べている。この指摘は，ボードリヤールが述べるどころと基本的に同じである⁴⁾。体感される速度は，重力の空間的支配を逃れるすべ

となり、速度自体よりも早いために持続的時間を無効にするのである（ポードリヤール1988：11-12）。例えば、テレビの衛星中継における送受信の継時的速度が「LIVE」という即時性に読み替えられるとき、我々の存在=所有していた空間は対象に向かって移動する速度を追い越して、持続的時間と均質な空間とは不連続性へ霧散する⁵⁾。そのとき、われわれは遠隔存在するといえ⁶⁾、そこでは部分と全体との関係が転倒される。持続的時間において、すべてを経験することが或る長さに渡ることをいうのであれば、当然、存在の瞬間性においては経験したことがすべてである。修正装置と速度との関係を考えるに、追加による修正は速度の中でも機能するが、削除による修正は持続的で遅い速度の中でしか可能でないように思われる。しかし、一定の早さを超えると、速度は追加の余地のない全体性を構成する。

1.2. 読みと全体性

ここで、e-textの読みが思い出される。いうまでもなく、それは物理的に固定された明確な境界がなく、分散ハイパーメディア資源は膨大で、「全体」を読むものは誰もいない。そこでは、行為の持続によって一つの全体を読むことが重要なだけでなく、読んだものだけがすべてといえる。もちろん、印刷テキストも拾い読みできる。グラスムック（1995：060-061）が論じているように、〈グーテンベルクの銀河系〉でのアルファベット順の排列が語句の検索と拾い読みとを可能にしたのであり、引用符なども文字の〈ことばとしてのつながり〉と〈モノとしてのつながり〉とを切り離すものと見ることができる（引用符については別に論じる）。但、印刷テキストは図書館などでのストックを前提し⁷⁾、e-textは分散的なフローを前提する（金子 1999 参照）。過剰なフローが我々の情報処理能力を問題にする限り、誰しも自分の読んだものが全体であると理解してよい。しかし、自分の読み方が唯一である^{すべて}と考えるべきではないはずである。

注釈の挿入可能性を排し、他者のことばをテキストから締め出すときには、印刷本の作者を裏返しただけであり、テキストは線の秩序の境界に閉ざされる。また、ウェブブラウザ市場が米企業の寡占を許している⁸⁾ことから、他ソフトの閲覧を制約するウェブページが増えている。情報の可視性の増大に反するかかる傾向も、我々のコミュニケーションを利することにはならないだろう。開かれた非線形的結合の

中では、読み手の裁量に注目されるが、コミュニケーションが力関係の競争を伴う以上、テキストを閉ざし、可視化に対する不可視化・非線性に対する線性の導入（この点は別項にも述べる）といった逆行する動きも一方の本質といわなければならない⁹⁾。

1.3. テキストの修正装置の分類

趙（2002）は、志賀直哉の草稿とテキストとの比較から、簡潔と評されることの多い表現特徴が、削除と追加という両方向の改変によって成ることを明らかにしているが、テキストの修正装置は、追加と削除という観点から考えることができそうに思える。

表現は、しばしば、その全体性と統一性とに言及される。紙や書物の線の表現では、両者が一致するのが常だが、それが表現一般の性質でないことは明らかだろう。追加・削除という基準は、1.1に見たように全体性に関わっており、同時に拾い読みや引用との関わりでは、1.2および2に見るように統一性に関わっているといえる。テキストの修正装置という観点は、メディア形態を問わず表現の全体性と統一性とを考えるとときに有効であると考えられる。

本稿では、追加・削除という点から、〈テキストの修正装置〉を図1のように整理してみたい。1.4では追加と削除とによって整理されるテキストの修正装置が、具体的な言語表現の中でどのように現れるのか考察することにしたい。

また、テキストの修正装置は、現象のレベルにおいて区分することもできるだろう。野村（2000）などを参考に、マイクロ・メゾ・マクロの3分法をとるときには図2のようになるだろう。2では〈テク

	削除	あり	なし
追加		翻訳 誤字訂正（書き換え） 引用（符号あり）	塗りつぶし（黒塗り） 書き込み 注釈 修正液 字消し線 校正 修正発話
なし		消しゴム（擦りとる） 引用 インク消し デリートキー ウェブブラウザ 拾い読み 斜め読み	文体フィルタソフト 機械翻訳 暗号（符号化）
← 読み手利用可 →			

図1 テキスト修正装置の分類

	言語的 ←	→ 物理的	
マクロ	翻訳 パロディー 引用 注釈		
メゾ	拾い読み 斜め読み 修正発話 書き込み	ブラウザ 符号化 正誤表	
マイクロ	引用構文 誤字書換え 機械翻訳 (文法 ベース)	字消し線 塗りつぶし	消しゴム インク消し デリートキー 修正液

図2 テキスト修正装置の分類 (2)

ストの引用〉が、マクロ・メゾ・マイクロのそれぞれの水準で、テキストの修正装置としてどのように見做されるのか、特にその形式に注目して考察する。

1.4. 上書きによる修正

丸谷才一「年の残り」では、見せ消しの手法が使われている。少年の日記に上書きされた字消し線と物語中の隠蔽された遺書とが対比され、存在という事実の〈削除〉の意味が問われる。消しゴムは過去にさかのぼって原因を消去するが、字消し線は現在の結果を追加する。また、符号による修正は必ずしも否定を意味するのではない。「内部は外部である。」のような抹消記号は対立を棄却することで二項性を無化する。ここでは、遺書の存在の否定と存在をめぐる問の拒絶、過去と現在、老人の受け入れる運命と少年の他愛ない生活との対比と交錯とが、削除による修正と追加による修正との対比に託されている¹⁰⁾。30数年後に改めて遺書の存在を問われた老医師は「なかった」と付け加えるが、「何も言わずに死んだ」とき痕跡の消去のなされることが示されるのである。

2. 引用と文例集

テキストは物理的支えなしには存立しえない。従って、テキストは認知性の環境内に留まるだけでなく、「引用」されなければならない。テキスト理論に依って言い換えれば、テキストは関係的に定義される引用のモザイクで、ことばは隅々まで鍵括弧で括られている。痕跡としての文字は原理的に〈発音可能〉

だが、その本質は口頭言語と書記言語との区別に権利上先立って存在するものと見做される¹¹⁾。書かれたコトバが音声的に朗唱されうるのならば、話されたコトバは文字によって繰り返されなければならないはずだが、書かれたコトバもまた文字によって繰り返される。我々は、そのような言語形態の反復を引用と呼ぶ。「引用」とは既に書かれたものを書くことだといえる。

藤田 (2000) は、先行して存在するコトバ (それ自体の類似記号か発話の行為や発話という事柄の指標記号と見做される) を類似記号によって提示することを意図した表現が「引用」だとしている。ここで、類似記号が必ずしも類似物を意味しない (内田編 1986:37) ことから、極めて一般的な規定になっている。鎌田 (2000) は、引用を元発話に関わりのある「創造的表現」であるとする「引用句創造説」を提案しているが、基本的にはこの規定を外れるものでない。「引用句創造説」のいうところは、表現が現実の再現でないということであろう。

2.1. 引用と翻訳

小森 (1988:3-10) がいうように、引用は、先行するテキストの連合関係と統辞関係とを新たなテキストの表層に喚起し、相互干渉作用を生じさせるもので、その表示が特定の語によってなされたとしても、関係はテキスト空間の全体に関わる (このことは、ハイパーリンクを考えると明らかである)。連合関係はテキストの表層に潜在し、統辞関係はテキストの表層に顕在するが、引用がテキストの表層での削除の操作を伴うことは、電子メールの返信などで実感することができる¹²⁾。

引用を特定の部分テキストの部分の削除と見做しうるならば、引用符や引用中の表記符号の有無が問題になりうる。つまり、引用符のない直接引用が〈削除〉によるのに対し、引用符や省略記号 (リーダー「…」や「(中略)」など) つきの引用は、〈削除+追加〉という手続きとなる。この点で引用は翻訳と似ている。機械翻訳が表現の置換 (同じ文を必ず同じ文で訳す) と見られるのに対し、自然翻訳は、新たなテキストを対置した上で元テキストを消す手続きであるといえるだろう (そこから翻訳は作者の表現の追体験と言われてきた)¹³⁾。引用と翻訳との違いは、手続き上の前後関係で、引用が同等性の提示を意図するものであることが知られる。但、口頭語での引用 (直接話法) は、伝送連鎖での保守力が

脆弱である。そのため、翻訳との区別は難しくなる¹⁴⁾。また、沈黙に対する「『……』」や、疑問や不可解さに対する「『?』」、驚きに対する「『!』」のような引用にも同じことが言える¹⁵⁾。

ここで、スタイルの引用という問題を考えておくべきだろう。鎌田(2000:57)は、「[直接話法は：引用者]『直接話法スタイル』とでもいうべきレトリカルな要素を含む、新たに『創造』される表現である」と述べているが、〈スタイルとはスタイルの引用である〉というバルト(1979)のヴィジョンに近づくならば、先行して実在したテキストの「模倣」であろうとなかろうと、スタイルは一言語の規範的文例集からの引用である。この引用はステレオタイプの類型の使用といえ、形式の問題であっても内容の問題でない。内容は、形式が形式と内容とのシステムである限りにおいて機能する。また、形式が、書き手によって意識的に選択されているのではないということに注意が必要であろう。形式の存在以前に意識はありえないからである。文体論は、行動が存在を規定し、存在が意識を規定すると考えるのである。

2.2. 引用の形式

言語表現の中には引用であることを明示する形式が存在する。引用の最も明瞭な標識は引用符である。引用符には様々な形式があり、小カギ(「」)や二重カギ(『』)のほか、二重ダッシュ(——)、二重リーダ(……)、山形(< >)、二重ギメ(《 》)ダブルクォーテーション(“ ”)などもしばしば用いられる¹⁶⁾。これらの記号には、テキスト内で使い分けが見られるのが普通である。例えば、手許の文庫本(村上春樹『風の歌を聴け』)を調べてみると、通用にしたがって直接引用は小カギ、会話表現の話者交代は改行で示されているが、引用中の引用には山形と二重カギが用いられ、話ことばでは前者、書きことばでは後者という使い分けが観察される。また、ラジオ放送時に断続的にやりとりされるオフレコの会話は二重ダッシュを用いて散らし書きされ、音楽や小説などのひとまとまりの引用には小カギと字下げとが用いられている。

大内(1986:58)は、杉みき子の「夜の果物屋」について、「『——』による会話表現が地の文との対比から、あたかもつぶやきのような、際立たせない効果をもたらしている」と指摘しているが、小カギには引用を強く明示する機能がある。なぜ引用を明

示するのかと素朴に考えれば、テキストが等しく引用であることを隠すこと、また、表現にテキスト内/間の距離に応じた階層性を持ち込むことで、線性を生じるということだろう。藤田(1996)は、池波正太郎『剣客商売』について「その一文のモザイク的成り立ちを殊更示して見せる」小カギの用法を指摘している。この場合、引用のモザイク性は、平面的広がりではなく、文章の物理的な一次元的展開の中で、内部に序列性を感じさせる。ネルソンは、ディレクトリ構造は線性の残滓で、ウェブはハイパertextでない¹⁷⁾と批判している。ハイパertextは、全体を平面且つ表面とする純粋なリンクの構造でなければならないということだろうが、引用符(小カギ)は、装飾的なウェブページの構造とよく似ている。本稿では、引用符は、引用という表現行為の表現性を線性の表現と見做すための記号であると考えたい¹⁸⁾。話されたことばの引用に引用符が用いられやすい¹⁹⁾のは線性の顕在化という点で自然だろう。その機能が引用の明示だとすると、引用符は過度に装飾的といえ、結果として印刷テキストの視覚的修辭のひとつになっている。

3. まとめ

様々な事象を横断的に概観してきたが、1.3でも触れたように〈テキストの修正装置〉という観点からは、メディア形態を問わずに表現の全体性と統一性を考える場合に有効であると見られよう。また、〈テキストの修正装置〉という観点から捉えるときに、字消し線や引用符などの周辺的と見做されがちな表記上の要素を含め、引用、翻訳、注釈、拾い読み、ウェブブラウザ、表現の速度などが文体論の問題として統一的な見通の中で論じられることも理解されるであろう。なお、個別的な事象に関するより詳細な分析には別論を用意する。

注

- 1) ここで「記憶」というのは、テキストが相互に関係化され置換される場を指す。
- 2) 「消しゴムとデリートキーとが同じものであることは、手書き作文とワープロ作文とがスタイルに影響しないことで確かめられる(拙論 2002:228)」が、後者は(電光的に可変的な文字列と関わることから)読み手の利用可能性がより大きい。

- 3) 原文では「外界の時間」「客観的な時間の流れ」などとされるが、ここでは私信によりこう表現する。
- 4) 表現自体の速度と表現された速度とがまったく同じ問題を構成すると主張するものではない。
- 5) 持続的で計時的な時間（連続的・均質＝空間のようなもの）から瞬間的で経験的な時間（不連続で伸縮するもの）へと言い換えることもできよう。時間概念が、連続的・持続的時間と断続的・瞬間的時間とに二分されるのは、大雑把であったとしても役に立つ。持続性・連続性を含むかぎり、それは空間のメタファーを免れない（バシュラール 1997）からである。
- 6) 存在の転移ではあっても、〈身体の移動〉に対する〈意識のみの移動〉でない。
- 7) 書物には、本質的に〈完成〉を目指して〈蒐集〉される性質があると考えられる。
- 8) onestat.com (<http://www.onestat.com/>) のリサーチによれば、MSIE の占拠率は2002年1月現在95.3%である。
- 9) 力関係の競合は様々な逆用を生む。例えば、ICT は、地縁・血縁を脱した広範な人的交流とともに、草の根でのテロルにも利用される。
- 10) 丸谷は、最終章と他の部分との対比を明確にするため〈消し〉の多い日記の文章体を使ったと自作解説している（『文学界』43年9月号138頁）。
- 11) このことは「エクリチュール」などと呼ばれる。
- 12) 引用の本質が構成要素の省略にあるとするものではない。
- 13) 機械翻訳と文体との関係については、拙論（1999）で言及した。
- 14) この点を敷衍するのが引用句創造説だろう。実際に、鎌田（2000：82）では、映画の吹き替え翻訳が直接引用の一種とされている。
- 15) 藤田（2000：581）は、「……」のような引用の用例は、引用が類似記号の表現であることを明らかにするものとしている。
- 16) 小カギのような文中に埋め込まれる引用符に加えて、電子メールや電子掲示板では行頭に不等号や二重不等号を用いる習慣がある。
- 11 名前：ななしたん
>10
>>なんか恥ずかしい…
恥しいのが(・V・)イイ!! のでは? w
この例では、発言番号10の一部を引用しコメントを付加したものであることが示される。このよう

なスタイルは、川上他（1993：38）が指摘しているように「改めて打ち直す必要がない」ところから広く行われている。

- 17) <http://ted.hyperland.com/buyin.txt>
- 18) 旧来の線の秩序を解体し、新たな線の秩序を表現の表層に定着させる点で、引用符は「ディープリンク」と似た問題を提起するだろう（いわゆる「文脈を無視した引用」）。
- 19) 藤田（2000：585-586）は、話されたコトバの引用に引用符が用いられやすく、間接話法などで通例避けられるのは「リアルさの意識の強弱の反映」であるとしている。

文 献

- アイゼンステイン、エリザベス 1987『印刷革命』別宮貞徳監訳 [1983] みすず書房。
- 内田種臣編 1986『パース著作集2 記号学』勁草書房。
- 内山和也 1999『共感覚の文体～視覚的表現に関する日本語文体論の基礎的研究』広島大学修士論文。
——— 2002「書体と文体」、『広島大学大学院教育学研究科紀要第二部』第50号：225-233。
——— 2002「現代口語体の表現スタイルについて」、『広島大学日本語教育研究』第12号：83-90。
- 大内善一 1986「表現開発のための〈句読法〉指導の試み」、『表現研究』第44号、55-63 表現学会。
- 金子務 1999「自然記号・イメージとしての書物」図書館情報大学講演録『知の銀河系 第5集 多様な「知」と情報化社会』図書館情報大学。
- 鎌田修 2000『日本語の引用』ひつじ書房。
- 川上善郎・他 1993『電子ネットワークの社会心理』誠信書房。
- グラスムック、フォルカー 1995「チューリングの銀河系[1]ーディープ・サーフェイス讚」、『Inter Communication』12：060-070、大宮訳 [1994] NTT 出版。
- 小森陽一 1988『文体としての物語』筑摩書房。
- 趙宣映 2002「文の長さに関する一考察ー志賀直哉の方法を通してー」、『広島大学大学院教育学研究科紀要第2部』第50号：175-180。
- 杉本巧 2001「三島由紀夫『新聞紙』における時間の表現ー概念的隠喩を用いた分析ー」、『文体論研究』第47号 日本文体論学会。
- ネルソン、テッド 1994『リテラリーマシン ハイ

パーテキスト原論』ハイテクノロジー：コミュニケーションズ社訳 [1980, 1992] アスキー。
野村真木夫 2000『日本語のテキスト－関係・効果・様相－』ひつじ書房。
バシュラール, ガストン 1997 [1969] 『瞬間の直観』掛下栄一郎訳 [1932] 紀伊国屋書店。
バルト, ロラン 1979「文体とそのイメージ」, 『現代思想』7(4):106-113 青土社。
バルト, ロラン 1987『言語のざわめき』花輪訳

[1984] みすず書房。
藤田保幸 1998「書記テキストにおける引用マーカ―としてのカギカッコの用法－池波正太郎『剣客商売』を例として」, 前田編『国語文字史の研究四』189-222 和泉書院。
藤田保幸 2000『国語引用溝文の研究』和泉書院。
ボードリヤール, ジャン 1988『アメリカ 砂漠よ永遠に』田中訳 [1986] 法政大学出版局。